

『当帰』108話エピソード脚本

形式： 日本向け縦型AIショートドラマ。1話90～120秒。全3シーズン、各36話。

一言テーマ： 家は血縁が与えるものではない。誰かのために一灯を残そうとする人が与えるものだ。古いものは新しいものにとって代わられなくてもいい。並んで生きていける。

全体方針

- **主舞台：** 与善堂。日本語店名は「とうき堂」。前店後宅のつくりで、前堂は商い、奥は暮らし、小さな竈で食事を作り、荷は裏口から入る。茜と実とは奥に住む。源造はすでに故人。食卓に源造の席は設けない。芳江、忠雄、洋一が不在の時も、食器で待つ表現はしない。
- **町の医療：** 灯野町には別に高木医師がおり、「高木診療所」を営んでいる。町の人はず高木に診てもらい、処方せんを持ってとうき堂に薬を取りに来る。高木は低頻度で登場し、主に処方せん、印、口伝、病家を通して店に入る。実は店主であり薬剤師。できるのは処方監査、調剤、確認、煎じ方と禁忌の説明まで。診断も処方も行わない。茜は手代であり、薬証を越権判断しない。
- **人物駆動：** 茜は問題を見つけ、先に動き、結果を受け止め、三季の構造を前へ押す。実は口が悪く、境界を守り、茜の行動を金、責任、待つこと、失うことへ落とし込む。守る、待つ、支える、手放す重みを担う。実は人を見誤り、隠しごとをし、勝手に決めてしまう。茜は焦り、関係の境界を越えることがある。ただし薬を取り違えたり、急に愚かになったりして物語を作らない。
- **表現の鎖：** 感情は人物の行動で見せる。茜が動かし、実が深め、御札が収め、薬性が形を与え、与善堂が受け止める。薬性はその時の人物の偏りを映すだけ。1話につき薬性を語る台詞は多くて一つ。薬理講座にしない。
- **フックと転換：** 冒頭は「本来そこにはない物」「すぐ引っ込められない決断」「誰かを止める処方や帳面」を優先する。対立する双方が代価を払う。転換は現実の状態を変えること。薬包、帳面、鍵、給金、荷路、戸、机、委託、または家の中の誰かの位置が変わる。
- **御札と御守：** 御札は家の神棚に祀る。御守は身につける。洋一の御守袋には茜が入れた薄い楮皮和紙がある。忠雄の御守袋には芳江が入れた当帰片がある。芳江の御守袋には実が入れた薄い処方紙がある。中身は見せない。
- **AI制作：** 通常回は実、茜、街坊一人を基本とし、必要に応じて機能人物を一人加える。同一ショットで連続して演技する顔は三人まで。群像は手、靴、暖簾、薬包、帳面、単独リアクションに分ける。衝突は固定カメラと手元動作で成立させる。

中心人物の機能

人物	身分	全体での機能	越えてはいけない線
茜	忠雄と芳江の娘。とうき堂の手代。 1930年7月12日生まれ	第一主線。みんなが帰ることを願う少女から、自分で残る人になり、最後は違う人に違う居場所を与えられる人になる	愚かな見習いにしない。単独で診断、処方、高リスク生薬判断をしない
実	源造に拾われ育てられた現店主、薬剤師	第二主線。薬を守り、戸を守り、待つことを守る。口は悪いが手は確か。隠すことを守ることだと思いがち	医師ではない。常に正しい人にしない。茜の金、婚姻、未来を決めない
洋一	忠雄の戦友の遺児。父の臨終時に忠雄へ託され、とうき堂で茜と育つ。17歳で東京へ西洋医学を学びに出る	第三季で新しい方法と、新しい離別の可能性を持ち帰る。共同労働の中で再び家の人になる	薬舗の帳場で診察しない。西洋医学で古い薬舗を圧倒しない。恋愛線で職業線を覆わない
芳江	茜の母。仕入れ、薬草栽培、薬路の人	遠方の責任と母娘の裂け目。短い帰宅でも必ず具体的な薬路の仕事を持ち帰る	一晩の帰宅で長年の不在を洗い流さない
忠雄	茜の父。長く外におり、手紙と送金を寄こす	不在の父の責任。送金は全額、茜の傍身銭として残る	戦争場面や自己弁護の手紙で日常の主場を奪わない
高木医師	灯野町の既存医師。高木診療所の責任者	とうき堂へ合法処方、転診の境界、第三季の同行関係をもたらす	薬舗に常駐しない。経営や家庭問題を解決する便利役にしない

街坊と機能人物

人物	入り口	劇的機能	境界
きぬ	婦人の暮らし、針仕事、家の内側	口の鋭い目撃者。人の面子を守り、薬舗の越界も刺す	作者の代弁者にしない。重病や死で冗談を言わせない
お梅	米屋、配給、女性手代の仕事	茜に別の生活尺度と、最長一週間の助勤場所を与える	茜を長く連れ去らない。去留を決めない
勝	郵便、自転車、窓口情報	手紙、通知、半分本当の噂を素早く店へ運ぶ	手紙を勝手に開けない。秘密を突然知っていない
平田	回覧、旧隣組、木札	肩書きと面子、実際の責任のズレを軽喜劇にする	政府の決裁者にしない。組織権を独占し続けない
徳次	紙芝居、噂、誇張	日常の誤解を膨らませ、言い過ぎの代価を払う	本当の秘密を握らない。重い場で笑いを無理に入れない
みつお	子ども、薄荷飴、小さな交換	大人の遠回りを直球で崩し、暮らしを温める	制度や主題を子どもに説明させない
岩吉	豆腐坊、労働、道具	貧しさの中で体面を守る。第三季では病と去留を自分の口で言う	ただ助けられる人にしない。結果を他人が公表しない
権藤	倉庫、運送、票据	腕はあるが近道をしたがる。灰色の荷路から手続きを守る側へ移る	悪党にも、突然改心する救い主にもしない
久蔵	帳面、証文、領収書	営業、人情、仕入れを分け、実行可能な方法を出す	主人公の仲直り役にしない。万能軍師にしない
千代	裂けた竹籠、旧い隣人の記憶	実に茜とは別の旧日の余韻を与える	旧恋にしない。別家庭線を始めない
金万昌	金記薬号、現金、現物、店の買収提示	大きな規模にも現実の理由があることを示す外圧	低級な悪役にしない。陰謀で断薬しない。突然金を出して救わない
佐伯、保健所職員	税務資料、公共衛生手続き	制度を、悪意のない現実の阻力として入れる	官の反派にしない。人物弧線を背負わせない

薬性による人物造形

人物	主な薬性方向	動作に落とす偏り
実	当帰、陳皮の底味	欠けたところを補い、下から支え、人を待とうとする。言葉は苦いが、手は人を戻す
茜	茜草。成長後は黄芪の働きも帯びる	経験を重ねるほど色が深くなる。先に飛び出し、のちに散らばった力をつないで事を成す
洋一	薄荷 → 石膏 → 桂枝	初めは清く、速く、冷たい。やがて明晰さを守りながら、日常へ温度を戻す
権藤	附子の力	力や道そのものは悪ではない。手続きで収めて初めて人を傷つけない
久蔵	山楂の消積	長年混ざった帳面を少しずつ分ける。ただし情まで消すことはできない

薬性表は字幕カード、ナレーション、人物の自己比喩に入れない。普通回では一味の薬が一つの選択を照らしてよいが、人物は常に薬より大きい。

前店後宅の空間機能

空間	担うべき機能	誤用禁止
入口、暖簾、門灯	外の圧力が入る場所。今日も誰かが応じるかを示す	入口で身の上話を完結させない。灯を特定の待たれる人だけのものにしない
前堂	街坊が買う、欠く、抵てる、返す、託す、聞くために来る情景喜劇の主场	待合室、救済所、集会所にしない
帳場	薬、金、体面、知る権利、責任がぶつかる場所	各場面に処方、薬包、金、帳面、鍵、荷札などの実交換を置く
百子柜と調剤場	実の薬剤師としての境界。処方監査、秤量、確認、封存、補斗	茜が高リスク判断を単独でしない。薬の取り違えで成長を作らない
奥と小竈	実と茜の住まい。食事、手紙、争いの余波、病中の世話	同居を理由に、実が茜の私金や未来を決める権利を持たない。食器で帰属を象徴しない
裏口と荷受け	芳江の薬包、仕入れ、荷札、湿り、返品が入る	知人の荷だからと再検せず柜に入れない
神棚	家の御札奉祀、水、榊、供米と塩、日常の引き渡し	御守を神棚に入れない。神意で薬効や去留を決めない
薬祖棚	薬舗の職業的根と製薬への敬意	病気平癒を願う場にしない。処方や品質確認の代わりにしない
源造の旧問診机	旧医者 の倫理と、実が越えない境界	永久に不使用。実や茜がここで診察、処方をしない
灯野診療所	第三季で洋一が独立して診察、カルテ、費用、転診を扱う場所	とうき堂とは戸、机、病案を分ける。家はつながっても職業責任は混ぜない

第一季 灯はまだ点いている

時期：1946年正月～1947年5月。

核心：実は薬舗を守り、人の帰りを待つ。茜もまた帰りを待つ。茜は「置いていかれた人」から「今日は私が守る人」へ変わる。

第1話「戸の隙間の処方」

【冒頭】開店前、高木医師の印がある処方せんが戸の隙間から差し込まれ、人影は逃げる。

茜は追いかけて、古い借りを問われるのを恐れた帰郷青年だと気づく。通りで「先に薬を出す。お金はあとで」と約束してしまう。実は処方せんを秤の下に置く。「お前が約束したのは店の金だ」。茜は取り消さない。実は処方に問題がないことを確認し、調剤するが、茜に旧大福帳へ欠額と理由を書かせる。

夜、青年は戸を直すための半端な木材を置いていく。実は「足りない」と言いながら、それをぐらつく敷居の下へ入れる。茜が門灯を点ける。最初の借りは消えていない。けれど人は追い出されていない。

第2話「一包足りない」

【前堂】二人の病家が、同じ日、同じ高木医師の処方せんを持って来る。薬斗には一人分しかない。

茜は先着順にしたい。実は先に来た処方には翌日開始、後の処方には当日開始と書かれているのを見る。茜は勝手に順序を変えるのを恐れ、高木に確認したいと言う。実は二枚を並べる。「そうだ。順番はこっちで当てるものじゃない」。

勝が自転車で確認に行き、高木は書面で返す。最後の一包は医師の指示どおり当日必要な人へ。もう一人には隣町の薬局の住所を渡す。夜、実は次の荷を追い、雨に濡れて空手で戻る。茜は謝らず、濡れた外套を小竈の近くに掛ける。

第3話「店を出た薬」

【冒頭】きぬが封の切れた薬包を帳場へ叩きつける。「飲んでない。返金して」。

実は受け取らない。言い方が硬く、きぬは背を向ける。茜は追いかけて、こっそり返金しようとする。実が内側から呼び止める。「お前が返すのはあの人の腹立ちだ。払うのは次の人の薬だ」。街坊に見られながら、茜は金を戻すしかない。

夕方、きぬはまた来る。薬は返さず、保存方法だけ聞く。実が先に言う。「午前は言い方が足りなかった」。きぬは鼻を鳴らし、暖簾を直す布を茜へ押しつける。「礼じゃないよ。暖簾が寒いだけ」。

第4話「糖紙」

【前堂】みつおが薄荷飴を舐め、包みの和紙を丸める。茜が取り返すが、紙は裂ける。

洋一が町を出る前に残した御守袋も薄く擦れていた。茜は新しく作った薬糖の残り和紙から、唯一きれいな一枚を選び、薄く裁って御守袋へ入れ、外側だけ縫う。元の封は触らない。実が針を渡ししながら言う。「曲がっても、あいつには見えない」。茜。「だから曲げないの」。

みつおが聞く。「紙でさびしいの治る？」実。「治らない」。茜は一番曲がった糖を子どもの口へ入れる。「でも口はふさげる」。

第5話「二つの水」

【冒頭】茜は神棚の水を薬祖棚の前に置き、薬祖棚の布を神棚に掛けてしまう。

子どもが、二つは同じ神様かと聞く。茜は「だいたい」と強がる。後ろで実が咳をする。茜はむっとする。「朝、どうして自分で替えなかったの」。実。「できると言った人がいたから」。

二人は口を叩きながらやり直す。子どもが折れた榊を持って来る。茜は供えず、入口の水瓶に挿す。夜、彼女は二つの水を替える。実は少し曲がった杯だけ直す。

第6話「読めない三行目」

【冒頭】雨で処方さんの三行目がにじむ。病家は「前の二回どおりに」と実を急かす。

茜は前二回の記録を知っているので、同じでよいと思う。実は薬斗を閉める。「昨日の字は、今日の字の代わりに口をきかない」。病家は怒鳴る。茜は目を赤くしながらも、自転車で高木医師へ確認に行く。

高木の追記を持って、茜はずぶ濡れで帰る。実は門灯を外まで掛けて待っていた。茜は処方せんを出す。「三行目、一味少なかった」。実。「だから今日の雨は、無駄じゃない」。

第7話「徳次が見た実」

【前堂】徳次の紙芝居には、源造が棍棒を振り、人さらい三人を追い払う場面が描かれている。少年の実は戸より大きい。

実は冷たく、徳次が当時灯野町にいなかったことをばらす。街坊は笑い、茜もただの大げさな話として聞く。徳次は話で薄荷飴一つを払おうとする。茜は旧欠を開く。「英雄は先に返して」。

実は糖を出さず、白湯だけ出す。片づけの後、源造の古い薬匙を奥の柜へしまう。茜は見ていたが、初めて追いかけて聞かなかった。

第8話「米穀通帳がない」

【冒頭】勝が飛び込む。茜が米穀通帳をなくしたと言い張る。米を受け取る期限はもう半刻しかない。

茜は、自分が乾いた抽斗へ移したことを知っている。だが勝の言い方が悪く、意地で探させる。平田が来て、帳場はさらに散らかる。街口の米受け取りの鈴が鳴って、茜はようやく白状する。

勝は通帳を受け取ってもすぐ行かない。「先に言えば、俺は一回恥をかかずに済んだ」。茜は返す。「先に聞けば、私は一回腹を立てずに済んだ」。二人は米屋へ走るが、やはり一歩遅い。その日少なくなった米は、茜が自分の分から補う。実に肩代わりさせない。

第9話「一欄に入らない」

【前堂】老婆が卵と布切れで、家庭常備品と古い欠けの一部を抵てに来る。さらに勝が米を運んだ人情も一緒に書いてほしいと言う。

茜は金額、抵当、人情の理由を旧大福帳の同じ欄へ詰め込み、墨が塊になる。通りがかった久蔵が見る。「今日なら読める。来年は？」実は庇って、自分には読めると言う。久蔵がその場で三行目は誰が誰に欠いているのか聞くと、二人とも逆に答える。

茜は破らない。乱れたまま残す。「来年、また笑えばいい」。この頁は第二季で帳面を分ける時、誰も避けられない証拠になる。

第10話「薬包はすぐ柜に入れない」

【冒頭】芳江からの薬包が届く。茜はすでに百子柜へ運ぼうとしている。実は丸ごと裏口へ戻す。

茜は、母の荷にだけ難癖をつけていると思う。実は外紙を解き、票据を見、匂いを確かめ、一角が湿っているのを見つける。中には芳江の手縫いの小荷包と「茜へ」の一言もある。茜はさらに怒る。「薬は調べるのに、物なら人をなだめられるの？」

実は湿った部分を隔離し、合格分だけ再検して柜に入れる。荷包は芳江の代わりに話さない。ただ茜の手元に置かれる。茜はその夜使わない。翌日、腰の内側に結ぶ。

第11話「糖はどこから」

【前堂】榎藤が糖料の袋を帳場に空ける。「半値だ。今日返事がいる」。

糖に困る街坊はもう門に集まっている。子どもの目を見た茜は、先にとって票据を後で補えばと思う。実は来路だけ聞く。榎藤は答えられない。茜は、糖を食べられない人の前で実が規則を守ってみせしていると責める。実は空の糖罐を押す。「受けろ。明日誰かに聞かれたら、お前が答えろ」。

茜は最後に袋口を結び直す。榎藤は侮辱されたと感じ、糖料を担いで去る。夕方、正規批発先の住所だけ投げ込む。「お前らを助けるんじゃない。罐に負けるのが嫌なだけだ」。

第12話「手紙は半分だけ読まれた」

【冒頭】東京からの手紙が届く。実は「学業はまずまず」まで読むと、折ってしまう。

茜が奪う。後半には、洋一の学びが延びるかもしれないとある。茜は実がわざと知らせなかったと思う。実は「決まっていないことを言えば、待つ人が一人増えるだけだ」と言う。茜。「待つかどうかは、私のこと」。

その日、夫の再診指示を隠した婦人の紙を、実はそのまま返す。夜、実は洋一の手紙をもう一度広げ、最後まで読む。茜は勝ったのではない。ただ、全部を知る権利を得た。

第13話「急に使えない金」

【冒頭】実が出した旧紙幣を客がその場で押し返す。帳場の釣り銭が急に問題になる。

新円切替の話が町へ入る。平田は公文を持っているのに説明するほど混乱し、徳次は「預金封鎖」を「金が一晩で紙になる」と言い替える。茜は並ぶ人のために先に欠きへ回そうとし、半日で一頁を埋める。実は、その混乱に乗って古い欠けを伸ばそうとする人を見つける。

彼は人前で名を言わない。ただその人の帳の横に新円を一枚置く。「明日、この数を持ってきて」。相手は赤くなって受け取る。茜は初めて、規則も人の顔を残せると見る。

第14話「角を折った金」

【前堂】勝が「角を折った旧札から先に替えられる」と発見を披露する。街坊はすぐ、帳場いっばいに札の角を折る。

平田は説明するほど聞いてもらえず、徳次は折り方ごとに等級まで作る。茜も一枚折る。実が見る。「折ったら、金が増えたか」。茜はむっとして勝と窓口へ確かめに行く。

店へ戻った勝は一言も言わず、折られた角をゆっくり伸ばす。茜は交換説明の横に、折られて痛そうな紙鶴を描く。誰も謝らない。噂の力だけが抜ける。

第15話「半籠の卵」

【冒頭】きぬが半籠の卵を持って来て、欠きに当てると言う。いちばん上の一個は割れている。

茜は全部を無傷の卵として値をつけ、きぬの面子を守ろうとする。実は一つずつ灯に透かし、使える分だけ書く。きぬは人前で怒る。「茜を半日抱いてやったことまで数えるのかい」。同じ欄に、何年も前の人情が混ざっていた。

茜は「損耗」を消し、「卵折抵。子守りは値引きしない」と書き直す。きぬは面倒だと悪態をつきながら、帰り際に割れた卵を夕飯用に残す。実。「これは帳に入れない」。茜。「鍋に入れる」。

第16話「返した処方」

【冒頭】字の荒い処方を包みかけたところで、茜は薬名の末字が読めないことに気づく。

並ぶ客は「実なら読める」と急かす。実は見て言う。「自分の当て方は読める。高木の字は読めない」。処方を返す。病家は怒り、薬舗が自分を行ったり来たりさせていると言う。

高木が自ら書き直し、病家に詫びる。実は正しさを見せびらかさない。ただ開いてしまった薬包紙を損として記す。茜は見る。境界を守る人も、金を払う。

第17話「芳江が一晩泊まる」

【裏口】芳江が深夜に帰る。靴底は泥だらけ。最初の言葉は娘を思う言葉ではなく、「奥の倉のどの格が空いてる？」。

彼女は次の季節に試せる薬草の種と、二軒の仕入れ先を持ち帰る。茜は食事まで我慢して、何日いられるのか聞く。芳江は「夜明けには出る」。母娘はぶつかる。一人は薬路は止められないと言い、一人は家の人は薬包ではないと言う。

夜、母娘は種を分ける。針目と薬札が交互に動く。実は取りなさない。ただ芳江の御守袋の擦れた外側を、茜へ差し出して縫わせる。夜明け前、芳江は失敗した仕入れ先を一つ消す。「ここは行かないで」。少なくともこの一度、彼女は使える道と、行ってはいけない道を持ち帰った。

第18話「一日早い」

【冒頭】徳次が交換期限を一日早く言い、老婆が夜通し来て、入口で転びかける。

勝は期限を調べると、徳次を人前で責めようとする。茜も謝らせたい。徳次は「早めに準備させたただけだ」と意地を張る。実は徳次が角を折った札を押し返す。「一日早いのは悪くない。他人の恐れで自分の場を支えるのが悪い」。

翌日、徳次は店先に立ち、窓口の言葉だけを繰り返す、一字も足さない。茜は神棚の水を替え、初めて自分が正しかったと急いで言わなかった。

第19話「いつか出ていく」

【前堂】女客が茜の手早い薬包みを見て、ぽつりと言う。「いくら覚えても、いつか嫁に出るんだろうね」。

茜は子どもに渡そうとしていた薄荷飴を薬包に一つ余分に入れ、実にその場で抜かれる。実も自分を臨時の手伝いだと思っているのだと感じ、わざと自分の給金はどうか記すのか聞く。実は帳面をめくるが、「茜用度」しか出てこない。

女客は帰ったのに、その言葉は帳場に残る。茜は前掛けをほどき、また結ぶ。「米屋で何日か働く。よそでは手代をどう書くか見る」。

第20話「米屋の一週間」

【米屋／とうき堂】茜はお梅の米屋で一週間働く。初日から、配達順を店の若い者より早く組む。

できないからではない。初めて、勤務時間、給金、職分が別々に書かれているのを見る。とうき堂では実が一人で店を開ける。薬を量ると接客できず、帳を合わせると薬を急かされる。口では静かだと言いながら、暖簾は一日に三度曲がる。

七日目、お梅は長く残らないかと言う。茜は答えず、まずとうき堂へ自分の物を取りに戻る。実は彼女の給金袋を見て、初めて「いつ戻る」と聞かない。

第21話「名前はどこに書く」

【前堂】茜は米屋の給金記録を帳場に広げ、実に自分の正式な位置を求める。

実は店が小さいから細かく分けなくていいと言う。茜は聞く。「私が病んだら、誰の仕事が減るの。私が出たら、誰の場所が空くの」。ちょうど三人の客が入る。実一人では回らず、二度「茜」と呼ぶが、茜は立ったまま動かない。

実は帳面に「手代・茜」と書くしかない。茜はすぐ接客に入るが、給金欄を押し返す。「数がまだ」。名前一つで衝突は終わらない。

第22話「鍵は戸だけ開けるのか」

【冒頭】茜は戸の外で半刻待つ。帰ってきた実は、自分が鍵を渡していなかったことに気づく。

実はその夜、赤い紐の鍵を作る。ただ言うのは「今度から戸を塞ぐな」。茜は受け取り、帳柜を開けられるか聞く。実はできないと言う。遅くまで開けることを決められるか聞く。実はまたできないと言う。

茜は鍵を帳場へ置く。「それは、私が入れる証拠で、ここに私がいる証拠じゃない」。実は追わない。その夜、帳柜の横に仕事用の鍵を一つ別に出しておく。

第23話「明日は来ない」

【前堂】茜は包袱を源造の旧問診机へ置く。赤紐の鍵がその上にある。

彼女は迫る。「私はここで何なの」。実は「手代」と答える。茜は「給金だけ？」と詰める。実は「家の人」と言えず、包袱を旧机に置くなと注意してしまう。茜は笑う。「机には場所がある。私にはないんだ」。

その夜、茜はお梅のところへ泊まる。とうき堂は初めて実一人で鍵をかける。実は門灯を点けるが、茜の鍵を壁へ戻さない。

第24話「家の人も夜遅く帰る」

【冒頭】翌朝、とうき堂は開いていない。街坊は初めて、実が戸の外で人を待っているのを見る。

茜が街の端から戻る。説得されて帰ったのではない。実が一晩、自分の鍵を動かさなかったことに気づいたからだ。実は昨夜言えなかった言葉を短くする。「家の人も、夜遅く帰る」。茜はまだ鍵を受け取らない。「手代の給金は？」

実は職名、月給、見てよい帳面の範囲を書いた新しい頁を渡す。茜はそこで初めて戸を開ける。ついでに神棚前の少し曲がった御札台を直す。継ぐとは言わない。ただ今日の商いを始める。

第25話「二度目も受けない」

【前堂】権藤がまた糖料を持ってくる。今度は一見きちんとした票据つきだ。

茜が受取印を押しかけると、紙の日付が荷の到着より後だと気づく。権藤は怒る。町中がとうき堂の糖不足を知っていると言う。実は茜の代わりに断らず、ただ聞く。「印はお前の手にある。受けるのか」。

茜は印を置き、正規批発先に再発行を求める。権藤は「悪く覚えたな」と罵って荷を担いで去る。翌日、彼は本当の住所だけ持って来る。荷はない。茜は住所を仕入れ頁へ貼る。この拒絶には、すぐの褒美はない。

第26話「傍身銭」

【冒頭】忠雄からの送金を、実は一枚も欠かさず新しい荷包へ入れる。茜はこれで店に荷を足せると思う。

実は、これは茜の傍身銭であり、営業帳へ入れないと言う。茜は、家が食べるにも困るのに、どうして家を救う金にならないのか問う。実。「お前は店の薬斗じゃない。足りないからってお前を補いに使わない」。言葉が

重すぎて、茜は荷包を押し返す。

久蔵が日付、金額、所有者を書く。実は月末に浮いた一枚を加え、別に自分の名で署名する。以後、忠雄の送金は全額袋へ入り、実の節約分も別署名で積まれ、店金と混ざらない。茜は最後に荷包を腰内へ戻すが言う。「本当に店が閉まる時は、私はまた出す」。実。「その時も止める」。

第27話「敷居の雑炊」

【冒頭】雨の夜、少年が軒下に縮こまっている。街坊は、あの子は盗みをしたことがあると言う。

茜はすぐ奥へ入れようとする。実は雑炊を敷居の内側に置くだけ。「残る、は一言で決めることじゃない」。茜は、自分にもそうだったのだと責める。飯と仕事はくれた。でも家かどうかは言わない。

実はまず、きぬに衣を頼み、勝に正式な受け入れ先へ走らせる。少年は迎えられる前に碗を洗い、戸の内側へ伏せて置く。茜はその水跡を見る。戸を開けることと、人の残り方を決めることは同じではない。

第28話「源造は戸を開けただけ」

【奥・夜】茜が少年の碗を洗っていると、実が言う。「俺も十二の時、あの敷居に座った」。

徳次の英雄譚を否定する。打ち合いはなかった。源造は一碗の雑炊を出し、翌日から掃除をさせた。それが一日ずつ続いた。茜は、源造が「ここはお前の家だ」と言ったのか聞く。実は、言わなかったと答える。

茜。「じゃあ、どうして分かったの」。実は古い薬匙を彼女の手置き、すぐ戻す。「源造が病んだ後、これがどの格を開けるか知っていたのは俺だけだった」。戸の外できぬが聞いているが、入ってこない。秘密は説明で終わるものではない。働きでできるものだ。

第29話「先に手を止める」

【冒頭】茜が一人で店を開け、当帰斗へ手を入れかけた時、紙包みの湿りに気づく。

高木処方の病家は急かす。茜は経験で続けず、封存し、印を付け、実の再検を待つ。客は「何も決められないのか」と怒る。その言葉は彼女のいちばん痛いところを刺す。実が戻り、薬材が使えないことを確認する。改めて配り直した。

茜は客へ遅れを説明し、当日の調剤料を返す。実。「手を止めるのも決断だ」。茜。「褒めてるみたい。言い直して」。実。「調子に乗るな」。

第30話「古い写真に一人足りない」

【特別回】排水溝修理後の軽い食事で、徳次が古い写真を見つける。端が切られ、一人分が欠けている。

街坊は順に誰かを当てようとし、話はどんどん秘聞らしくなる。実は言わない。茜は、切り口が芳江の薬包に入っていた古い写真紙と合うことに気づく。合わせてみると、写真の外へ走り出した忠雄が映っただけだった。追い出された誰かではない。

人々は笑って散る。実は写真を神棚の下の家用柜へ納める。神棚には入れない。茜が聞く。「一人足りないと、必ず物語があるの？」実。「徳次はそれで食ってる」。

第31話「組長札が落ちた」

【冒頭】旧隣組解散の通知が届く。平田は組長札を抱くが、先に木釘が床へ落ちる。

彼は肩書きがなければ誰も聞かないと恐れる。ちょうど産婦の家族が、高木診療所の夜間入口を聞きに来る。平田は反射的に走って案内し、入口に着いてから札を持っていないことに気づく。茜。「みんな、あなたの足を知ってる」。

平田は戻って札を帳場に置くが、まだ渡さない。実は奪わず、新しい木釘を出す。「正式期限まで掛けろ。一日足りなくても、多くてもだめだ」。

第32話「最後の一軒に丸がない」

【街路／前堂】旧回覧は耳の遠い老人の一軒だけ残る。平田は午前中に戻すため、代わりに丸を付けようとする。

茜は止め、老人にゆっくり読ませる。老人は何度も、これから病んだらどこへ行けばよいか聞く。茜は毎回答える。「先に高木医師へ。処方はこちらへ持って来て」。平田は三度も言ったと呆れるが、老人は四度目に自分で言えた。

回覧は遅れ、平田は叱られる。夜、彼は老人宅の切れた鈴紐を直す。どの組織名にも記さない。

第33話「札のない人」

【冒頭】平田が組長札を外すと、徳次は人前で知らないふりをする。

迷った病家は、それでも平田が高木診療所まで案内した道だけ覚えている。徳次は「札もないのに世話か」と笑い続ける。平田は本当に手を引き、病家は薬舗の前で立ち尽くす。

茜は平田を追い、最後に一度だけ案内してほしいと言う。平田。「何を根拠に」。茜は「個人案内」と書いた紙を渡す。「歩いたこと」。平田は字が汚いと文句を言い、帰ると紙を小さく畳んでしまう。

第34話「入口に伝言役がない」

【冒頭】高木診療所が急に半日休みになる。通知が伝わらず、三人の病家が空白の受付札を持ってとうき堂へ詰める。

茜は固定の連絡表を作り直そうとする。平田はまた責任者にされるのを恐れる。実は、薬舗が診療所の患者管理を引き受けることはできないと言う。言い合いの最中、高木の薬童が駆け込み、通知を自分の門だけに貼ったと詫げる。

最後は高木診療所が変更を書き、勝が届け、とうき堂は入口に副本だけ貼る。茜の方法は残ったが、責任は全部薬舗へ落ちなかった。

第35話「半日、茜だけ」

【冒頭】実が批発先へ薬材の再検に行く。出た直後、病家が高木処方と「胸が苦しい」の一言を同時に茜へ出す。

茜は症状には答えず、処方の形式だけ確かめる。印はあるが日付が違う。病家は挑発する。「実さんならできる」。茜は証明したくなって薬斗へ手を伸ばしかけ、止める。勝に頼み、病家を高木へ戻して確認させる。

半日の間、彼女は日用品を売り、帳をつけ、抵て物を受け、確認後の処方を受け取り、実の再検後に調剤を待つ。閉店前、実が聞く。「何か起きたか」。茜。「起きた。全部、大きくしなかった」。

第36話「今日は私が守る」

【冒頭】お梅が長期雇用の給金袋を持って来る。同じ時、芳江の薬包、忠雄の送金、洋一の手紙が一度に届く。

茜が待つ人たちはまだ帰らない。よそからは、より明確な前途が差し出される。彼女はすぐ選ばない。先に商いを済ませる。芳江の薬包は隔離再検。忠雄の金は傍身荷包へ。洋一の手紙は最後まで読む。お梅の給金袋は封のまま返す。

夜、実が鍵をかけに行こうとすると、茜が先に火柴箱を取る。「みんな帰らないから守るんじゃない。今日は私が守る」。門灯を点け、神棚の水も替える。実は火柴を取り返さず、奥の戸は茜自身に閉めさせる。

第二季 残る人たち

時期：1949年初め～1950年夏。

核心：薬不足、古い掛け、値上がり、帳面の確認がとうき堂を閉店寸前まで追い込む。茜は店を心配するだけの人から、人、帳、荷、責任をつなげる人へ変わる。薬舗は街坊を受け止める場所から、街坊と一緒に支える場所になる。

第37話「印が落ちる寸前」

【冒頭】榎藤が納品書を押さえ、実の印が紙の上で止まる。「またお前か」。

榎藤は完全な票据を持って戻る。荷も問題なさそうだ。実は昔の件で決めつけ、わざと三度も検品する。待つ病家が不満を漏らす。茜は実の手から印を取る。「荷を見て。人を見ないで」。

薬材は合格。実は人前で印を押すしかない。榎藤は得意がらずに言う。「その一言、三年遅い」。その夜、実は昔の拒貨記録を出す。破らない。

第38話「おからも抵てに来る」

【前堂】岩吉がおからの籠を押して来る。豆腐坊の古い欠きに当てたいと言う。権藤が人前で「屑も金か」と言う。

岩吉は届いた豆腐を全部引っ込める。茜は守りたくて値を高くつけすぎる。実は消す。「顔を守るのと、値を吊るのは違う」。岩吉は、おからで何が作れるか自分で説明し、安いがただではない値を決める。

午後、権藤が腹を空かせ、鍋の匂いを嗅ぐ。茜は一杯出し、帳には「街坊分食、薬価に折らず」と書く。権藤は鍋縁をやけに丁寧に拭く。誰も笑わない。その方がよけい居心地が悪い。

第39話「裂け口は外へ」

【冒頭】旧隣の千代が裂けた竹籠を帳場に置く。「十何年借りてた。今日返す」。

彼女は、実が残ったから、他の人は安心して道を探しに出られたのだと言う。実はすぐ籠を奥柜へ隠す。茜は二人の昔を追うが、実は「籠を借りた隣人」としか言わない。茜が籠を荷受け棚へ戻し、実がまた隠す。三度繰り返す。

きぬが呆れる。「籠に足はない。歩いてるのはあんたたちだよ」。最後、竹籠はまた荷を入れるために残る。裂け口は外へ向ける。古い物は飾るだけが記憶ではない。

第40話「三枚目の納品書」

【冒頭】権藤が同じ荷を三度目に運び込む。前の二枚の誤った納品書は耳の後ろに挟まっている。

一枚目は産地がない。二枚目は重量が箱と合わない。待つ客がいる中、茜の印面は紙に触れかける。それでも秤をやり直す。半両足りない。権藤は怒る。「お前まで俺を信じないのか」。

茜。「私が信じるかどうかは、半両の薬の代わりにならない」。三枚目で荷、値、産地が合い、茜はようやく印を押す。権藤は二枚の誤単を持ち帰る。今度は隠すためではなく、倉庫に書き方を教えるためだ。

第41話「煤油の匂いの薬瓶」

【冒頭】子どもたちが空瓶を抱えて糖と換えに来る。茜が一本洗い終えた途端、実は隔離籠へ落とす。

瓶に煤油の匂いが残っている。子どもは洗えばいいと言い、茜も惜しい。実は聞く。「鼻で賭けられるか。次にこの瓶に入る薬を飲む人へ」。茜は争わず、瓶を薬用、非薬用、破損に分ける。

徳次が分類を瓶の試験だと言い、子どもたちは喜んで手伝う。煤油瓶は最後に入口の風よけ灯罩になる。薬柜には二度と入らない。間違った物は全部捨てるものでも、元の場所へ戻せるものでもない。

第42話「七日のおから」

【七日間の早回し】同じ籠のおからが街坊の間を七日巡る。きぬが煮る。お梅が団子へ混ぜる。平田は水を入れすぎて糊にする。徳次は勝手に醤油を足す。

七日目、権藤が正規の荷を運び、匂いに引かれて座る。岩吉が聞く。「屑か」。権藤。「今日は違う」。皆が笑う中、茜は七回の交換を七つの違う場所に記してしまい、誰が何を返したか分からないことに気づく。

最後の一份を入れているのは、千代の裂けた竹籠だ。実は新しい籠に替えようとする。岩吉が止める。「裂けたのは縁だ。底じゃない」。帳は乱れても、物にはそれぞれ使い道がある。

第43話「金があっても売らない」

【冒頭】常連が十分な金を帳場に置く。実は残り一包の薬を斗へ戻し、鍵をかける。

彼女の処方は期限切れだった。遠くに住むことを知る茜は、明日まで取っておくと言ってしまふ。実は人前で約束できないと言う。婦人は、薬があるのに売らないのかと怒り、これからは金記薬号へ行くといい捨てる。

茜は追いかけるが、高木診療所の住所だけ渡し、実の弁解はしない。翌日、婦人が新しい処方に戻ると、その一包は別の緊急処方に使われていた。茜は初めて、善意の約束が人を余計に恨ませることを知る。

第44話「初めて掛けを断る」

【冒頭】古い客がいつものように薬を持っていこうとする。実は大福帳を閉じる。「今回はもう掛けにできない」。

男は街坊の前で、子どもの古靴を抵てに置く。茜は靴を押し返し、自分が立て替えると言う。実は拒む。男は、二人に面子を潰されたと思い、子どもを連れて出る。

高木の薬童が追って来る。子どもは今日薬が要る。茜はこっそり立て替えず、男が今夜できる運搬仕事を見つける。薬は明確な工賃を根拠に短期掛けとする。靴は子どもの足に戻る。助けることには代価があり、返す道も残す。

第45話「高木先生にも薬がない」

【冒頭】高木医師が自ら三枚の処方を置く。「この一味、どれだけ残っている？」

薬斗は一人分しかない。診療所にも代替薬はない。三人の病家は入口にいて、全員聞いている。実は医療上の急迫性に基づいて高木自身に順序を決めてもらい、医師の選択を代行しない。高木も責任を薬舗へ投げない。

一人が薬を受け、二人は転介先の住所を持って去る。茜は初めて、高木が空の薬斗の前で「私にも手がない」と言うのを見る。夜、彼女は傍身銭の荷包へ手を伸ばす。実が押さえる。

第46話「自分を注ぎ込むな」

【奥】茜が荷包の金を全部卓上に出す。「次の定金には足りる」。

実は一枚ずつ押し戻す。茜は押し返しながらかく。「薬舗は私の家でしょう。なぜ私の金で救えないの」。実。「家は、欠けた所へお前を外してはめるものじゃない」。二人は前堂の客が門まで下がるほど言い合う。

数日帰っていた芳江は何も仲裁しない。ただ一つの仕入れ先を置く。試せるが、高く、遠い。茜は金を袋へ戻し、声を震わせる。「出すなと言うなら、別のものを探させて」。実。「探せ。自分を埋めるな」。

第47話「催促状が落ちる」

【冒頭】実が印泥を取ろうと抽斗を開けると、催促状の束が茜の足元へ落ちる。

三か月隠していた。茜は一枚ずつ読む。自分はいつも通り常連に掛けを許していたと知る。実は、知らせても金はないと弁解する。茜。「私が一緒に担うと信じなかったの。それとも、いい人は一人でやるものだと思うてるの」。

客が入って来る。実は紙をしまおうとする。茜は赤紐の鍵を一番上へ置く。「鍵は戸だけ開けるものじゃない」。その夜、催促状も鍵も帳場に広がったまま、誰も先にしまわない。

第48話「翌日、和解しない」

【冒頭】翌日の開店。実は全帳面を広げる。茜は自分の接客だけをし、見ようとししない。

実は営業、掛け、催し待ちの三欄に分け、規則で争いを解こうとする。茜は、また二人の仲直りの仕方を一人で決めたと指摘する。彼女はわざと一枚の処方記録を探さない。実は半日探し、記録が彼女のいつもの分類夹にあると知る。

午後、茜は夹を押し返す。「手伝わないんじゃない。あなたが口を開くのを待ってる」。実はやっと言う。「一緒に見る」。二人は一冊目だけ終える。一晩では仲直りしない。

第49話「空の薬斗」

【冒頭】茜が三つの常用薬斗を開く。画面いっぱい木底が見える。

彼女はいつも通り開店するが、「ある」「ない」としか答えられない。高木処方を持った三人の病家が空手で帰り、半日後にはとうき堂が閉まるという噂になる。金記薬号の金万昌が、現金で薬舗と旧帳を引き取ると申し出る。理由は現実的だ。彼には荷があり、町には薬が要る。

実は拒むが、次の定金を出せない。夜、二人は別々に食べる。茜は傍身銭を敷居に置く。実は一晩動かさない。夜明け、荷包はそのままあり、門の外には金記の二度目の提示が置かれている。

第50話「三足の灰だらけの靴」

【冒頭】芳江、千代、茜が三手に分かれて荷を探す。夕方、戻って来たのは灰のついた三足の靴だけ。

一つ目の道は全額現金を求める。二つ目は正規票据がない。三つ目は断薬。茜はせめて安い方を取るべきだと言う。実は拒む。芳江も実に立つ。茜は、母まで失敗を守れと教えるのかと思う。

千代は裂けた竹籠を帳場に置く。中には三枚の「在庫なし」の返事。「空手で帰っても、歩いた道は持って帰るものだよ」。茜は三つの失敗理由を仕入れ頁へ書く。無駄足とは書かない。

第51話「一枚足りない」

【冒頭】最初の合格薬材が届く。権藤は荷を下ろさない。「定金、一枚足りない」。

茜はまた荷包へ手を伸ばす。実は先に自分の翌日の飯代を出し、「家庭短借」として返済期限を書く。茜は怒る。自分の犠牲は許さないのに、実は飢えるつもりなのか。実。「俺は店から戻せる。お前の金に二つ目はない」。

荷は二枚の有効処方にかき足りない。三人目の病家は怒る。権藤が自分から自転車で隣町へ連れて行き、足代を取らない。薬斗は薄く一層だけ満ちる。危機は解けない。ただ一日増えた。

第52話「空鍋ひとつ」

【裏口】権藤が空鍋を抱えて来る。とうき堂の荷を運ぶ倉庫の六人は、昼がおからだけだという。

茜は薬舗で飯を出したい。実は六人に飯を出す金はないと言う。岩吉が豆腐半丁、きぬが葱、お梅が味噌を持ち、皆が時間をずらして入る。徳次が味見して塩辛くしすぎ、皆がさらに少しずつ足す羽目になる。

権藤は底の見える鍋を持ち帰り、同価の運搬時間を残して空箱を動かす。茜は納品書の裏に鍋を描き、「六人」と書く。温情は帳を免じない。ただ返し方を変える。

第53話「茜が頼みに行く」

【冒頭】茜が「長期供給を保証する」と紙に書くと、批発先はその場で半分破る。

彼女は一軒ずつ頼みに行く。金ではなく、車、空倉、紹介状、検品者を尋ねる。薬舗の苦境をあまりに明かしすぎ、金記が安い買収額を出す口実になる。実は帰って怒る。「店の床下まで見せる気か」。

茜。「あなたは足りないことを知られるのが怖い。私は、何が必要か誰も知らないのが怖い」。彼女は「保証」を消し、「まず一箱試す」と書く。実はまだ怒っているが、紙の末尾に自分が信じる検品者の名を加える。

第54話「出ていく人が持つもの」

【前堂】芳江は薬路へ戻る。千代は外地へ帰る。茜は店に残る。荷物は出ていく二人のものだけだ。

茜は自分の仕入れリストを全部芳江へ押しつけようとする。芳江は半分返す。「これはあなたの道。私の薬包じゃない」。母娘はまたぶつかる。千代は裂けた竹籠を残し、次は餅を入れてくれと言う。

洋一の写真が手紙と届く。裏には「卒業は近い。行き先は未定」とある。茜は写真を空の薬斗の前に立てる。「この足りなさを見せてやる」。実は動かさず、洋一の代わりに弁解もしない。

第55話「税務の手紙」

【冒頭】税務確認通知が旧大福帳の上に置かれる。最初の頁は、卵、布切れ、米運び、薄荷飴が一欄に詰まったあの旧帳だ。

茜は帳を抱えて久蔵のところへ行きかけ、門で引き返し、実へ面と向かって言う。久蔵は一筆ごとに、営業か人情かを問う。二人は続けて間違える。実は説明できる部分だけ出そうとする。久蔵は拒む。「少ない一頁は、乱れた一頁より見苦しい」。

帳を分けることにするが、「誰が人情の理由を読めるのか」でまた争う。第一夜は三束の白紙が分かれただけ。旧帳はまだ開いたままだ。

第56話「一人だけが担うものじゃない」

【前堂】実が、自分で勝手に免じた常連の欠きを線で消す。茜が筆を奪う。

久蔵は営業帳、人情帳、生薬仕入帳の三冊を提案する。実は人情を明らかに書けば傷つく人がいると案じ、なお自分だけで書こうとする。茜は催促状を押す。「源造が残した店は、あなた一人だけがいい人になる場所じゃない」。

きぬが入って来て聞く。初めて口を挟まない。ただ自分の旧帳頁を開く。「まず、私のこの乱れた分からやりな」。三冊の帳は理屈で成立したのではない。誰かが自分の恥ずかしさを先に卓上へ置いたからだ。

第57話「人情は全部書けない」

【冒頭】きぬが人情帳の「嫁の病を隠す手伝い」という一行を見て、破る。

彼女は、よその家の内側を薬舗の手柄のように書くのかと責める。茜は書かなければ帳が合わないと言い、実も古い書き方を庇う。久蔵は決めずに聞く。「理由は金が分かるところまで書くのか、人を傷つけるところまで書くのか」。

最後は「家中照護、姓名伏せ」とする。細部は別封し、催促には使わない。きぬは破った紙を持って帰り、焼く。帳は少し澄んだ。薬舗は初めて、自分たちが覚えすぎていたことを認める。

第58話「灯油はどの帳へ」

【冒頭】佐伯が確認卓から一枚の灯油領収書をつまむ。「この灯は、営業ですか、家用ですか」。

茜は門灯は遅い病家のために残すので営業帳だと言う。実は奥も光を借りるから半分に分けたい。二人は小さな額で争い、肝心の点を見失う。佐伯はさらに大きな問題を出す。一批の薬材領収書に連番がなく、証憑として扱えない。

補税額が上がり、次の定金がまた減る。佐伯は言う。「私は個人的には信じます。でも紙は代わりに足せません」。制度に悪意はない。結果は痛い。

第59話「三冊目は薬録」

【冒頭】芳江からの薬包と票据が二日に分かれて届く。佐伯は先に来た荷は認めるが、後からの口頭説明は認めない。

久蔵は生薬仕入帳を作る。家での呼び名は「薬録」。一批ごとに来路、日付、票据、再検、返品を記す。茜は一冊増えれば間違える場所も増えると言う。実は、芳江の荷も同じように再検する必要があるため、初めて同意する。

長く正常な損耗とされていた短斤が見つかる。権藤は倉庫へ戻って単を追う。彼は薬舗の穴を埋めず、責任者の署名を持ち帰る。薬録が初めて記したのは薬ではなく、本来あるべき一枚の紙だった。

第60話「今日は三冊とも開かない」

【冒頭】補税、定金、期限の来た貨款が同時に帳場へ乗る。とうき堂の帳面に初めて本当の赤字が出る。

茜は、一番言いやすい常連へ先に催促して埋めようとする。実も一瞬黙認する。その家の人が高木処方を持って来て、先に欠きの金を置く。だがそれで当日の薬代が足りなくなる。茜はその場で金を押し返し、自分の催促が間違いだったと認める。

夜、三冊の帳は開いているが、どこからも穴を埋める一筆は出ない。きぬがおからを置いていく。何も言わない。二人は食べ終え、門灯は消さない。全季で最も低い夜。問題は明日に残る。

第61話「人情順に催さない」

【冒頭】茜は催促順を作る。「一番話しやすい人」からだ。久蔵は紙を伏せる。

ちょうど欠きの父親が入り、自分が一番上だと見る。怒らず言う。「前は俺を貧しいと見た。今は言いやすいと見た。どっちも帳を見てない」。茜は刺され、金額と期限で同じ通知にすると言う。

実は強く催せば人情が切れると案じる。父親は返す。「規則が同じだから、返す顔ができる」。彼は自ら第一回の分割を決める。茜は営業帳に頁番号だけ書き、人情帳に彼の苦しさを書かない。

第62話「薬舗の募金じゃない」

【冒頭】欠きの父親が三人を連れて来る。小口の無尽講をしたいと言う。街坊はとうき堂への募金だと誤解する。

金万昌が人前で、薬舗が講を使って金を集めるのかと問う。官面の危うさがすぐ出る。実は断ろうとする。茜は、街坊には顔を見ずに助け合える方法が必要だと思う。二人は初めて反対側に立つ。どちらも完全には間違っていない。

久蔵が出す条件は、講会は薬舗から独立、実と茜は金を預からない、薬舗の欠きは入会条件にしない。茜は受け入れ、自分が書いた「先に薬舗の急場に使える」という草案を自分で破る。

第63話「頼母子講」

【前堂】老人は「頼母子講」と呼び、若者は「無尽講」と呼ぶ。名前だけで二派に分かれる。

徳次が便乗して「講を聞く代」を取ろうとし、きぬにその場で財布を奪われる。久蔵は法条を読まず、ただ一つずつ聞く。誰が保管するか、誰が記すか、誰が先に受けるか、抜ける時はどうするか。問うごとに、誰かが近道をしたがる。

最初の会は成立せず散る。茜は落ち込む。実。「早く散った方が、金を間違えた後よりいい」。彼女は署名されなかった規則を壁に貼り、街坊に一条ずつ直してもらう。もう一つの演説で全員を説得しない。

第64話「二つの鍵」

【冒頭】講会の金箱が置かれた途端、榎藤は自分一人が預かるのが一番安全だと言う。

場が静まる。久蔵は、誰であっても一人で街坊の金を預かるのは不適切だと説明する。二重錠、二つの鍵、二人がそろって初めて開ける。榎藤は自分を防ぐためだと思い、帰ろうとする。

茜は引き止めず、一つの鍵を一番口数の少ない岩吉へ渡す。榎藤は入口まで行き、戻ってもう一つを取る。「俺は錠を預かる。金は預からない」。初めての試し開けは三度引っかかり、笑いが彼の居心地の悪さを少し緩める。

第65話「この金は店を救わない」

【冒頭】とうき堂の貸付期限の日、講会の金箱には第一筆が入る。二つの数字は少しだけ足りないほど近い。

茜は箱を見る。実は何も言わない。先に榎藤が鍵を懐へしまう。「開けるやつがいたら、俺が役所へ言う」。茜は恥ずかしさから言い返す。「取るなんて言ってない」。榎藤。「見すぎだ」。

金万昌がまた買収提示を持って来る。茜は人前で講会の金箱をとうき堂の前堂から公会堂へ移す。二人管理とする。薬舗は一番近い近道を失い、街坊の規則への信頼を残す。

第66話「初めて箱が開かない」

【冒頭】二つの鍵を同時に回す。金箱は開かない。見物人はすぐ、誰かが錠を替えたのではと疑う。

榎藤は怒って壊そうとする。岩吉が止める。原因は片方の鍵に油汚れが固まっただけだった。前の試し開けの後、拭いていなかった。徳次はもう「講会初日に金が消えた」と半町へ流している。

茜は先に噂を消しに行かない。二人の保管者に人前で分解確認、記録、再試行をしてもらう。箱は開く。それでも第一回で抜ける人はいる。残った人の笑いは大きくない。だが規則は、最初の見苦しさに耐えた。

第67話「薬舗自身の金」

【冒頭】久蔵は講会の帳を遠ざけ、実と茜にとうき堂の営業金だけを数えさせる。「まだかなり足りない」。

茜は日用品、薬糖、合法に売れる家庭常備品の値を見直す。古い客に、薬不足につけ込むのかと怒られる。実は旧値に戻したが。茜は拒む。「一つ売るたび損をするのは、世話とは言わない」。

仕入れ値の変化を公開し、必要なものだけ調整し、小分けの選択肢も残す。初日の売上は増えない。むしろ客は減る。正しい制度は、すぐ拍手をくれない。

第68話「古い名前」

【前堂】老人が頼母子講の古い木札を持って来る。札がなければ正式ではないと言う。

若者は古い名が縁起悪いと言い、平田はまた責任者になりたがる。茜は安定のため木札を受け入れかける。実が聞く。「札には誰の名がある」。裏には、とっくに亡くなった旧保管人の名が刻まれていた。

旧称は老人の慣れとして残すが、旧札に誰かを任せない。木札は公会堂の壁へ掛け、鍵は生きている人の手に置く。古いものは残る。だが人の代わりに決め続けない。

第69話「一つ多い封筒」

【冒頭】講会箱に名のない封筒が一つ多い。額はちょうど、最初の正式開箱で公会堂を借り、紙と筆を買う分だ。

善意だと言う人も、帳違いを疑う人もいる。茜は受け取りたがる。久蔵は不明金の入帳を拒む。追うと、榎藤が場を貧相に見せたくなくてこっそり足した金だった。彼はむきになる。「自分の金でもだめか」。

茜。「助けるのはいい。でも金が勝手に生えたみたいにしてはいけない」。榎藤は人前で用途を明記する。皆は結局、体面の儀式をしないことにし、金を返す。封筒には折り目だけが一つ増える。

第70話「みつおの一番小さい包」

【冒頭】新しく届いた正規の糖料は、薄荷飴十二個分だけ。みつおは門の外で十三まで数えている。

茜が一番小さい一つを渡したい。実は贈り物ならどの帳から出るのか聞く。茜は童心まで制度にしたくなく、「損耗」と言う。久蔵が横で咳をする。みつおは自分が厄介になったと分かり、食べないと言って背を向ける。

茜は自分の給金から一番小さい一つを買い、お裾分けとして渡す。営業収入は記す。贈り物も本物だ。みつおは二つに割り、半分を外のもっと小さな子へ渡す。

第71話「最後の一枚がまだ来ない」

【冒頭】とうき堂は小口の貨款を払い終えるまで、最後の一枚だけ足りない。期限は閉店まで。

岩吉は修理した豆腐型の最初の売上で古欠を払うはずだった。だが試し使いで道具がまた割れる。榎藤の一件も、書き直して戻される。茜は何度も傍身銭を見る。実は今度、手で止めない。ただ荷包の所有権を書いた紙を横に置く。

茜は最後に荷包を懐へ戻す。「出したいと思うのは私のこと。出さないのも」。二人は半分だけ戸を閉める。まだ金はない。初めて実は、選択をまるごと彼女に残す。

第72話「薬斗は三分の一だけ」

【冒頭】翌朝、岩吉が直した道具を帳場へどんと置く。「最初の豆腐板、売れた」。

彼は約束した小額を返す。榎藤は書き直した正しい注文を持ち帰り、運送分の抵て金も払う。とうき堂は自分の営業金で最後の一枚をそろえる。講会金にも、茜の傍身銭にも手をつけない。金万昌は買収提示を引くが、次も現金が要ると釘を刺す。

茜は薬材を薬斗へ入れる。三分の一だけ。表面だけ満たして体面を作らない。閉店時、彼女はいつも通り神棚の水を替え、供米と塩を整える。御札に明日の満斗を願わない。実も並べ直しを受け取らない。門灯は満ちな

い薬斗を照らす。店は救われたのではない。一人で死守しない方法を覚えた。

第三季 それぞれの帰る場所

時期： 1951年夏～1952年除夜。

核心： 洋一が帰ることは、元の場所へ戻ることではない。茜は新旧の方法を現実落实到し、実は変化ごとに境界と代価を持たせる。旧机、新机、薬舗、診療所、そして人が、それぞれの場所を持つ。

第73話「手紙より先に」

【冒頭】勝が空の郵便袋を裏返す。「東京から、今日はない」。次の瞬間、旅行箱が暖簾を押し上げる。

洋一が入口に立つ。三度拭いた帳場に、茜は手を置く場所がない。「道中、暑かった？」とだけ聞く。洋一。「大丈夫」。茜。「じゃあ、入って」。実は集まる街坊を止め、先に箱を奥へ入れさせる。

半日後、手紙が届く。「帰期末定。どれだけいるかも未定」とある。洋一は取り返そうとするが、茜は読み終えている。人は手紙より先に着いた。言っていないことは、まだ家の真ん中に横たわる。

第74話「名前は合ってる。顔が違う」

【前堂】きぬが洋一の周りを一周する。「名前は合ってる。顔が違う」。

みつおが、子どもの頃に糖を隠した柜の隙間を覚えているか聞く。洋一は三度続けて間違える。街坊は笑い、茜は誰より大きく笑う。洋一が言う。「君たちだって、同じ場所にはいなかった」。笑いが一拍短くなる。

奥では、洋一の名がある柜格がきれいに拭かれ、中は空のまま。実は今夜の寝具だけ置き、余分な衣箱は庫へ戻す。帰って一晩泊まれる。それだけでは、もう住んでいることにならない。

第75話「処方箋の列が戸を塞ぐ」

【冒頭】開店と同時に列が乱れている。前の人は高木医師の処方で薬を取りに来た。後ろの人は帳場を越えて、不調を洋一へ言い始める。

高木の診療時間が短くなり、町の人は洋一が戻ったならとうき堂で診てもらえると思い込む。茜は思わず「これからは便利かも」と言う。洋一は彼女を見るが、乗らない。実は旧問診机の前に立つ。「ここは薬を出す店だ。医師には自分の机、記録、責任がいる」。

洋一は一人の急変だけ処置し、他の人は高木処方に従って調剤、または診療所へ戻る。七つの手が同時にがっかり下がる。茜は、洋一が「これから」を認めなかったことの方が気になる。

第76話「御札はどこへ置く」

【奥・夜】洋一は旅行箱の一つ目の留め具だけ外し、東京の住まいから丁寧に納めてきた御札を奉書紙のまま取り出す。

茜は家の御札をずらして正面を空けようとする。実が止める。先に手を清める。「家のは動かさない。お前にも場所はある」。神棚の次第に従い、ふさわしい脇へ祀る。元の御札を押さえず、身につける御守にも扱わない。

洋一。「ずっと、どこへ置けばいいか分からなかった」。茜。「だからずっと箱に？」腌菜を持って来たきぬが入口で言う。「御札は入ったよ。人はまだ荷ほどきしないのかい」。洋一は二つ目の留め具を外し、着替えを一枚だけ出す。

第77話「新しく作った一粒」

【冒頭】洋一は新しい薄荷飴をつまみながら、茜の襟元の古い御守を見ている。

「二十二にもなって、まだ糖紙を隠してるのか」。茜は、これは新しく作ったものだという。洋一は古いのはどこか聞く。茜は襟を押さえる。「教えない」。みつおが「知ってる、御守の」と言いかけ、茜は一番曲がった糖で口を塞ぐ。

夜、洋一は新しい糖の和紙も自分の御守袋の外側に入れる。古い封は解かない。旅行箱の二つ目の留め具は開いたまま。出した衣はまだ一枚だけ。

第78話「東京はまだ人を要る」

【冒頭】東京の仕事の誘いが源造の旧問診机に置かれている。洋一の手は椅子の背にかかる。

実は座らせない。「机は使わない」。洋一は、使わないのになぜ残すのかと聞く。実。「残すことと、今日の仕事をさせることは違う」。茜は返答期限があと十日だと見て、「東京の方が当然あなたを要る」と先に言う。まるで代わりに答えるように早い。

洋一は手紙をしまう。「また僕の代わりに決める」。茜も返す。「決めないなら、誰かが言うしかない」。二人は初めて本当に言い争う。御札は家に入った。去留はむしろ鋭くなる。

第79話「水路図の三つの赤丸」

【冒頭】高木医師が手描きの町内水路図を帳場に広げる。隣り合う三つの井戸に赤丸がある。

三軒で似た腸症状が出ている。高木は経口感染の危険を疑い、保健所へ報告済みだ。茜はすぐ「赤痢」と書くとする。洋一が筆を押さえる。「まだ検査前だ」。実はまず、来路不明のばら売り冷食と、「赤痢に効く」と称する私貨の販売を止める。

茜は二人が「できない」ばかり言うと不満を持ち、給水戸、熟食屋、配達路を地図に足す。行動は役に立つ。だが見出しはまだ「飲水注意」までだ。

第80話「病名を先に書かない」

【前堂】保健所職員が入るなり、茜が先に書いた「赤痢注意」を剥がす。

検体採取、飲水飲食の記録、確定には検査が必要だと説明する。危険を否定するのではない。先に病名を公表できないのだ。茜は、字面の正しさを待つと注意が遅れると言う。洋一は公式表現を支持し、またぶつかる。

実は新しい告示を入口へ打つ。「水は沸かす。飯は覆う。つらければ医師へ」。未確認の病名は書かず、結果を待つまで何もしないわけでもない。茜は、自分の焦りが半分残され、半分削られたことを見る。

第81話「これは糖。これを治さない」

【冒頭】母親が薄荷飴の罐を丸ごとつかみ、家族に「赤痢予防」で食べさせると言う。

茜は罐を押さえる。「これは糖。これを治さない」。街坊は信じず、徳次はどこかの百草丸は一粒で怖くないと流す。権藤がちょうど、来路が曖昧で、外箱に誇大効能がある一箱を持ち込む。利益は薬舗の穴を埋めるほどだ。

実は箱を未開封で返す。茜は今回は実より早く「拒収」の札を貼るが、自分も恐怖で糖を売りすぎそうになったことを認める。門外の母親は笑われない。高木診療所の住所と、煮沸の告示だけを受け取る。

第82話「一壺の水を何度言う」

【冒頭】平田が沸かしただけの水を、洗っていない古瓶へ注ぐ。全員が同時に止める。

保健所の示範は彼の手にかかると騒動になる。壺の蓋は落ち、飯罩は逆さになり、徳次は「煮沸」を「長いほど効く」と言い替える。茜は複雑な説明を三つにする。水を沸かす。飯を覆う。手を洗う。洋一は簡単すぎると言う。茜は耳の遠い老人にもう一度言わせる。

老人が覚えたのは茜の三つだけだった。洋一は専門語を消し、自分で書き直す。壺底が床へ鳴る。笑いが落ち、規則はようやく家へ持ち帰れるものになる。

第83話「後なら売れる」

【冒頭】同じく「整腸」と書かれた二つの薬箱が帳場に並ぶ。一つは来路不明。一つは薬事経路で届いた既成薬。

前に断られた客が、とうき堂は公式の品なら急に売ると皮肉を言う。実は逃げない。「前の箱は売れない。今の箱は、認められた表示どおりなら売れる。どちらも赤痢を治すとは言えない」。茜は一人ずつ、症状があれば高木が洋一へ行くこと、商品を確定診断の代わりにしないことを説明する。

一人は前後が違くと怒って別店へ行く。別の一人は誇大広告を剥がし、正式包装だけを買う。薬舗が守るのは、永遠に「だめ」と言うことではない。条件が変わった時、その理由まで言うことだ。

第84話「水を沸かし、飯を覆う」

【冒頭】検査結果と東京からの返事催促が同じ日に届く。洋一は先に公文を開き、自分の手紙は開けない。感染の危険は抑えられたが、生活上の予防は続く。洋一は入口で「経口伝播経路を遮断する」と言いかけ、老人の顔を見て言い直す。「水を沸かす。飯を覆う。つらければ医師へ」。茜は初めて訳さない。夜、茜は東京の手紙を彼へ押す。「開けるべきものを、私に当てさせないで」。洋一が開ける。期限は七日延びていた。次は公共衛生の仕事を使って、個人の決定を延ばせない。

第85話「病家が三度間違える」

【冒頭】同じ病家が、午前は高木診療所、午後はとうき堂、夕方はまた洋一を探して来る。三枚の紙は全部しわになっている。高木は年を取り、一部の診療時間を縮めている。洋一は家にいるが、独立した合法の診療空間がない。実は旧机を貸さない。病家は「規則は病より多い」と怒る。茜は隣の空家に貸家札があるのを見つけ、すぐ剥がす。彼女は洋一に言わず、翌日の採寸を家主と約束する。終わり、貸家札は東京の誘いの手紙の上に置かれる。彼女はまた、人の代わりに動き始めている。

第86話「先に測ってから」

【冒頭】洋一が戸を開けると、茜が隣家の窓を測っている。家主はすでに定金を待っている。洋一はその場で怒る。診療所は彼を引き留めるために作るものではない。茜は町に必要で、高木にも分担が要ると言う。洋一は、自分が東京を選んだら、この家は誰が責任を持つのかと聞く。実は茜を庇わず、「先にあなたの代わりに答えた」という言葉を彼女自身に撤回させる。茜は家主へ半日の手間賃を払い、定金は入れない。振り向いて言う。「家はあなたの代わりに借りない。病家が戸を間違える件は、あなたが答えて」。彼女は事を起こし、越界の代価も払う。

第87話「二つの戸」

【冒頭】高木医師が正式な転介意見を持って来る。町には独立した診療点が必要だが、申請するのは洋一本人だ。家主は再交渉に応じる。皆で動線を試す。七つの手がまず同時にとうき堂を指し、次に同じカメラ位置、同じ角度、同じ光で、隣の独立戸を指す。診察、病案、費用は診療所。処方調剤は薬舗。分かれた戸を見て、茜はとっさに言う。「じゃあ行かなくていい」。洋一は静かに彼女を見る。茜はやっと、本当に怖いのは病家の戸違いではなく、彼がまた行くことだと気づく。

第88話「処方是谁の字か」

【冒頭】新診療所の試運用初日、実は洋一の最初の処方をそのまま返す。「読めない」。

洋一は「たぶん」と言う。実が切る。「たぶんはいらない」。洋一は、実が規則で新機を押さえ込んでいると思う。茜も実側に立つが、誰かを庇うためではない。「患者が当てちゃいけない。薬剤師も当てちゃいけない」。洋一は書き直し、複写控えを作る。夜、古い自分の字と新しい字を比べ、処方テンプレートを診療所の机横へ貼る。返された一枚目は捨てない。新制度の始まりになる。

第89話「君たちが留めるんじゃない」

【冒頭】東京から返事を催す電話が来る。診療所申請書も洋一の署名を待つ。二枚の紙が同じ筆を待っている。

茜はもう引き留めない。逆に東京行きの列車時刻を書く。実は言う。「行くな、今日の病案を書いてから行け」。二人の静けさに洋一は苛立ち、誰が出ていっても慣れているのかと聞く。

茜。「慣れたんじゃない。あなたの代わりに選べないだけ」。洋一は先に病案へ署名し、次に本地の申請書へ署名する。「君たちが僕を留めるんじゃない。僕がここに残りたい」。東京への断りは、本人が書く。

第90話「問診機の答え」

【冒頭】洋一が新機の椅子の背へ手を掛け、座ろうとする。実が百子柜の後ろから来る。「座る前に、一言」。実は源造の旧問診機の縁に触れる。旧機はとうき堂に残るが、使わない。新機は独立した灯野診療所に置く。実は源造の医者としての言葉を伝える。問診机に座る者は、病だけを見て人を見ないことがあってはならない。処方だけを書き、貧しさを見ないことがあってはならない。器械はよく見るためのものだ。腕を見せるためではない。

洋一は、新機は何のためかと聞く。実。「人を安心させるためだ。病人の後ろには、家の人がいる」。茜は二つの戸の間の案内札を直す。新機は旧機を越えるものではない。旧機の一步先を歩くものだ。

第91話「封のある回覧」

【冒頭】結核検診の回覧は公開されている。岩吉への個人通知だけ、封がしてある。

徳次は誰が「特別な紙」を受け取ったのか当てようとする。きぬが初めて人前で止める。茜は公共の時間と場所だけ扱い、個人封筒に触れない。洋一は検診は確定診断ではないと説明する。実はマスクを買う人を全員同じ値で記し、恐怖を値上げの機会にしない。

岩吉は最後に信を取る。笑って、紙が一枚多いだけだと言う。帰り道、彼は封のところを三度触る。まだ開けない。

第92話「列の人は互いを見ない」

【街口】検診日。列の人は全員、わざと前だけを見る。誰も隣を見ない。

平田は知り合いだからと老人を先に入れようとする。茜は止める。老人は自分で待てると言う。徳次は笑い話を始めかけ、きぬに扇子を閉じられる。洋一は手続きの範囲で説明し、列で個人結果を語らない。

終わる頃、雨が来る。榎藤が車を出す、先に乗れるのは二人だけ。岩吉は老人と子どもに譲る。恐れられている人が、まだ他人へ道を譲っている。

第93話「再検査」

【冒頭】岩吉は「精密検査」の通知を豆腐代の下へ置く。赤い字の角だけ見える。

実は見ても聞かない。きぬが薬を買いに来て、岩吉の懐を指す。「金袋をそこに入れて、落ちないのかい」。岩吉。「金じゃない」。彼は自分で通知を出し、洋一に次はどこへ行けばよいか聞く。

洋一は再検査の流れと場所だけ説明し、病名を先に言わない。岩吉は車代を一枚ずつ数え、茜の立て替えを断る。店を出る時、初めて通知を奥底へ隠し戻さない。

第94話「誰が豆腐を売れないと言った」

【冒頭】徳次の「岩吉は療養へ行くらしい」が、「豆腐坊に近づけない」と伝わり、その日豆腐は一板も売れない。

結果はまだ岩吉本人が公にしていない。茜は徳次へ怒鳴り込みかけ、岩吉の秘密を言いかける。実が止める。「お前が代わりに怒るのも、代わりに言うことだ」。茜は未確認の噂を撤回させることしかできない。真相で噂を消せない。

夕方、岩吉は売れ残った豆腐を近所へ分け、誰が取ったか同じように記す。施しではない。腐らせないためだ。まだ言う準備はできていない。でも隠れてもいない。

第95話「結果は彼のもの」

【冒頭】再検査の結果は岩吉の手で封じられている。前堂の全員が急に忙しそうにする。

茜は聞きかけ、半分で止める。洋一は医師として周囲に話さない。実は言う。「言う時は、言う」。岩吉は先に欠き、道具、豆腐坊の鍵をどうするか尋ねる。誰も話題を病へ引き戻さない。

最後に、彼は自分で町を離れて療養が必要だと言う。徳次は筆を低くしまい、きぬは道中の食べ物を置く。かわいそうとは言わない。岩吉の運命は、岩吉自身が口にする。

第96話「療養へ行く人は自分で乗る」

【冒頭】榎藤が車を入口へ止める。敷いた綿入れが厚すぎて、岩吉は座ると沈む。

皆が世話を焼きすぎ、彼を何もできない人にしてしまう。岩吉は怒り、自分で荷を結び直し、車票を確かめ、豆腐坊の鍵を指定した人へ渡す。茜は彼の清單どおり委託を記し、「私たちが決める」を足さない。

出発前、岩吉は徳次に門口の木札を見ておいてくれと言う。徳次は物語を書かず、埃だけ拭くと約束する。車が行った後、木札はまっすぐ掛かっている。薬舗の誰も、追って保重と叫ばない。

第97話「欠きは人について行かない」

【冒頭】岩吉が町を離れることを理由に、薬舗へ古い欠きを全部消してやれと言う人がいる。

茜は応じかける。療養へ行く人に催すことはないと思う。久蔵は、岩吉が分割と道具収益を書き残している以上、勝手に免じるのは彼の返す力を取り消すことでもあると言う。別の客乙が急いで言う。「俺の金は、戻ってきてから返してもら。返さなくていいって意味じゃない」。言葉の意味がやっと明らかになる。

茜は約束期限を一時止めるだけで、消さず、家族にも催さない。その一行は残り、催促頁から「本人委託により暫時保留」へ移る。人の位置は、離れたからといって消されない。

第98話「封じられた箱」

【冒頭】二人の帰還者が、封じられた箱を入口へ置く。ただ「忠雄さんのものです」と言う。

戦場は出ない。あるのは交接紙、印、擦り減った箱角だけ。茜はすぐ開けたい。実が押さえる。箱には芳江本人へ渡すとある。勝は至急電報を出し、洋一は交接書を見る。誰も芳江の代わりに開けない。

箱は低い卓に三日置かれる。茜は通るたびに止まる。三日目、やっと覆布を直し、鍵に触れなくなる。

第99話「忠雄の御守」

【冒頭】芳江が駆け戻り、手を洗って自分で箱を開ける。最初に出るのは写真ではない。擦り切れた御守袋だ。

彼女はただ言う。「私が縫ったの」。袋の中の当帰片は出さない。封糸もほどかない。茜は、父はなぜ送金のたびにもう少し書かなかったのか聞く。芳江は答えられない。ただ歴年の送金控えと、実が残した傍身銭の署名紙を並べる。

御守、写真、手紙は低卓に置く。神棚には入れない。忠雄は元の位置へ戻らなかった。残した責任も、十分だったとは言われない。

第100話「知っていても、待ちきれないわけじゃない」

【奥】茜は父の短い手紙を全部広げ、芳江がこうなる可能性を前から知っていたのか問い詰める。

芳江は言う。「あり得ると知っていても、待ちきれるとは限らない」。茜は、ならなぜ薬路を歩き続けたのか聞く。芳江。「薬包は自分で帰ってこないから」。二人の言葉はどちらも硬い。きぬが針仕事を持って来て、一目見て退き、戸だけ半分閉める。

芳江は破れた靴下を出す。茜が踵を補い、母が口を補う。針目は真ん中でつながる。二人は和解しない。ただ初めて、同じ一つの物を縫い終える。

第101話「実が横になる番」

【冒頭】実が薬斗を開けようとして柜の縁につかまり、次の瞬間、鍵束が床へ落ちる。

忠雄の遺品が家へ来てから、実は夜ごと滞った帳と荷を整え、昼はいつも通り店を開けていた。洋一は彼を独立診療所へ連れて行き、休む必要があると確認する。とうき堂は処方調剤を一時止め、入口に転介薬局を明記する。茜は日用品販売、接客、転介だけ残す。

彼女は意地で全部を抱え、すでに支払済みの日用品を二度渡しかける。久蔵が聞く。「今のあんた、誰に似てる」。茜はようやく分担する。実が起きようとすると、彼女は火柴箱を取る。「今日はあなたの番じゃない」。実は初めて横になる。

第102話「同じ一粒」

【街口】七五三の参拝日。一人の子は新しい服、一人の子は袖口を補った古い服。二つの家の大人は薬舗の前で互いの目を避ける。

茜は同じ大きさの薄荷飴を二人の子へ渡す。どちらが体面あるかは言わない。正規流通のチョコレートはまだ少ない。洋一が買えたのは小さな一片だけ。茜は薄く分け、子ども、きぬ、岩吉の療養所からの返事を通して、一度のお裾分けにする。

実はまだ休んでいる。茜は臨時に神棚の水を替え、終わると火柴箱を元の場所へ戻す。もう守れる。だが勝手に交接を宣言しない。

第103話「公布は、今日全部が変わることではない」

【冒頭】1952年4月11日、関連法が公布される。平田はすぐ、古い組長札を柜の底から出す。

茜も自治会をすぐ作りたがる。久蔵は附則と過渡期がまだ終わっていないと提醒する。実は公文を返す。「公布は、今日全部が変わることじゃない」。ちょうど一軒の戸が壊れ、平田は肩書きを待たず直しに行く。

茜は回覧を届け、最後の家まで行ってから裏の附則を読んでいなかったと気づき、また追直す。制度はまだ落ちていない。足は先に動ける。だが「これから起こる」を「もう起きた」と言ってはいけない。

第104話「四月二十八日」

【前堂】ラジオが平和条約発効と占領終了を伝える。全員の手が止まる。徳次は大きな一言を言おうと口を開ける。

その時、旧公会堂の屋根から雨漏りの一滴が落ち、彼の頭に当たる。皆は放送を聞き終わると、また桶を置く。茜は屋根を直せる人を臨時に集める。会費は取らず、役も決めず、公共修繕の領収書を薬舗帳へ混ぜない。

洋一は正式組織を待たないのか聞く。茜。「雨は待たない」。実が帳はどうすると聞く。茜は別に挟んだ領収書を上げる。「まだ置き場がないものは、先に混ぜない」。

第105話「まだ下にある」

【公会堂】10月25日、過渡期が満了する。町民は加入、会費、監査、当番、任期を一つずつ確認する。

平田の木札を作り直そうとする人がある。平田は断る。「札は長く掛けると、人が降りるのを忘れる」。初めての新回覧が耳の遠い老人宅に届くと、皆がまた代わりに読もうとする。久蔵が紙を指す。「まだ下にあるよ」。平田は門の外で、老人が自分で読み終えるのを待つ。茜は遠くで見て、前へ出ない。第一季で彼女が学んだのは、人と一緒に待つことだった。今は、代われない待ち方もあると知っている。

第106話「裂け口はまだ外か」

【裏口】千代からの裂けた竹籠が暖簾を押し開ける。中には腌菜と一言。「裂け口はまだ外かい？」

皆が順に餅つきに来る。奥へは押し込まない。白米は七年前より増えたが、芳江はまだ少し雑穀を混ぜる。実は洋一の杵が速すぎると文句を言い、洋一は実の拍子が遅いと言う。最初の臼は杵にくつつきかける。

実は腌菜を取り出し、竹籠に餅をいっぱい詰めて返す。きぬ。「やっと籠に物を入れる気になったね」。茜は豆腐坊、遅く帰る人、高木診療所へ一つずつ残す。空席には残さない。

第107話「御札と火柴」

【冒頭】実は新年度の御札を茜の手へ渡し、自分は半歩下がる。

茜は手を清め、神棚を整え、新御札を奉祀し、古い御札は礼に従って返す支度をする。新旧を同時に積んで、惜しさの形にしない。続いて実は、水、榊、供米と塩の日常を彼女へ渡し、門灯の火柴箱も手元に置く。儀式はない。「接班」の二文字もない。

洋一が遅く帰り、二つの戸の間の光を見る。茜。「診療所の灯、見えた」。洋一。「これから遅くなる時は先に言う。君が待つのを知ってる」。茜。「じゃあ、あまり待たせないで」。感情は終幕まで押し込められない。ようやく一言として出る。

第108話「百八つの鐘」

【縦型終幕】画面下に街坊の足と籠。中段に並ぶとうき堂と灯野診療所の二つの戸。上には二つの灯だけ。

茜は営業帳、人情帳、「薬録」を一冊ずつ閉じる。洋一は独立カルテを鍵で閉める。実は源造の旧問診机を拭く。まだ使わない。忠雄の御守、写真、手紙は低卓に置かれ、神棚には入らない。高木医師が新年最初の空白処方せんの束を、薬舗の戸の隙間へ挟む。明年の日常も続く。

洋一。「明日は何時に開ける？」茜。「いつも通り」。実。「餅、まだ食べ終わってない」。第百八声が落ちる。二つの戸はもう施錠され、二つの灯はまだ点いている。家は昔の形へ戻らない。旧机、新机、残った人、帰ってきた人は、それでも並んで生きていける。

三季の感情と因果の最終確認

季	連続する感情波形	茜が動かすもの	実が深めるもの	御札による収束	現実の転換
第一季	待つ中の小喜劇 → 知る権利の衝突 → 身分の傷 → 離店の低谷 → 自分で戻る	掛けを約束する、手紙を最後まで読む、米屋へ行く、職名と給金を求める、半日一人で守る	善意を帳と責任へ落とす。隠し、避けて人を傷つけ、「家の人」を言わされる	第24話で御札台を直し、第36話で茜が水を替え灯を点ける	職名、給金、鍵、帳面を見る範囲が実際に変わる
第二季	薬不足の上昇 → 傍身銭の争い → 空薬斗と買収提示 → 税務の二度目の底 → 講会の失敗 → 街坊と共に担う	車、倉、紹介を頼み、帳分けと互助規則を進める	茜を店の穴埋めに使わず、一人では守れないと認める。近道を断るたび金と関係の代価を払う	第72話で茜が御札前の日常を整え、満斗を願わない	傍身銭は動かない。帳、荷、講会、薬舗資金が完全に分かれ、薬斗は三分の一だけ満ちる
第三季	帰還の喜び → 去留の争い → 疫病の圧力 → 採寸の越界 → 自分で残る → 結核と遺物の低谷 → 引き渡しの温み	水路図を描き、独立診療空間を進め、危機の中で生活行動を組む	薬舗と診療の境界を守り、旧机の倫理を渡し、最後に日常の世話を手放す	第76話で御札に先に場所ができ、第107話で茜が奉祀の日常を正式に担う	洋一が自分で本地申請に署名する。旧机は不使用、新机は独立。二つの戸が責任を分ける

職業と転場の最終確認

- すべての調剤は、高木医師または第三季の洋一による有効処方から入る。実は薬剤師の職務のみを担い、茜は単独で処方監査や診断をしない。
- 洋一が第三季で戻る前、町内医療は高木診療所が担う。灯野診療所成立後も二人の医師は並存し、高木は理由なく消されない。
- 与善堂は一貫して前店後宅である。街坊の圧力は前堂と入口から入り、家庭の余波は奥へ落ちる。茜と実は奥に住むが、営業権、私金、未来の選択は混ざらない。
- 隣接話の重要物は行き先がある。処方薬は薬斗へ入るか返る。金は明確な帳面か元の荷包へ入る。御札は神棚へ、御守は身につけるか低卓へ安置する。旧問診机は残るが、再使用されない。
- フックは医療結果の隠蔽や無理な暗転に頼らない。各話冒頭の異常は、その話の中で一つの現実状態を変える。同時に関係の余波は次話へ残してよい。
- 大きな和解は一つの台詞で終わらない。茜と実は給金、鍵、帳面を見る権限、分担で変わる。茜と芳江は一足の靴下を一緒に繕うだけ。茜と洋一は御札、独立診療所、本人署名、「君が待つのを知ってる」を通して少しずつ確かめる。